
ハイネ～黄昏色のオーバーキラー～

秋桜文彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイネ〜黄昏色のオーバーキラー〜

【Nコード】

N4039R

【作者名】

秋桜文彦

【あらすじ】

大戦時、突如起こった『ワールドエンド』によって荒廃した世界
その中心となった土地”極東”を放浪する青年、クロウ。
彼は探していた。自身が死ぬ方法を。

「生きたい」という己に架せられた呪いを疎ましく思いながら。
なぜ青年はそのような矛盾を抱えているのか？
それは彼が『オーバーキラー』であるからに他ならない。

第0話 プロローグ（前書き）

初投稿です。秋桜文彦しゅうおうぶんひこと申します。”秋桜”と書いて”コスモス”と普通は読みますが、”しゅうおう”とあえて音読みをさせていた
だいております。

第0話 プロローグ

西暦が二千数百年過ぎたある日。隕石が一つ、地球に落ちた。

突如として現れたそれは、日本の九州北部に衝突。後に『ブルー・スフィア』と名づけられ、世界中で研究が行われた。

研究が進み、数年後には『ブルー・スフィア』に資源としての価値があることが判明されると、人間の文明は大きく発展していく。当時は世界的にエネルギーや採掘資源の枯渇が問題視されており、それらを解決する糸口となった『ブルー・スフィア』の恩恵はまさしく革命的と言えよう。

特に『ブルー・スフィア』落下の折、管理を任されていた日本はこの隕石の研究が世界で最も進んでいた為、世界の中でトップの技術を有する大国となっていく。それに伴って世界経済と政治的な影響力を肥大化させていくことになるのにそう時間は掛からなかった。

だが、それは諸外国との軋轢を生むこととなる。日本の独占状態となっていた『ブルー・スフィア』をめぐり、ついには世界規模の戦争に発展する。

第三次世界大戦は『ブルー・スフィア』を狙うアメリカを中心とした多数の国々で編成された連合軍による日本への侵略戦争となった。

圧倒的な戦力を有する連合軍の優勢は明らか かに思えた。

それに対して日本は『ブルー・スフィア』によってもたらされた高い技術力を駆使した兵器・兵士を用いる事で連合軍と互角、それどころか返り討ちにするほどの戦果をあげ、絶対的とまで言われた

戦力差を覆した。思いもよらない抵抗に連合軍は攻めあぐね、戦争は当初の予想を裏切り長期化、十年にも渡る戦争の時代が続いた。

疲弊してきていた連合軍は、日本に対する恐怖に駆られ、ついには表向きには全世界で廃棄されいたことになっていた核兵器を投入によって自体の収集を図ろうとした。が、その前にこの戦争は終わりを迎えることとなる。九州に存在していた『ブルー・スフィア』が跡形もなく消滅したのだ。

それは予想外の出来事だった。突如、世界が白に染まるといえる程の光が地球全体を駆け抜けたかと思うと、それらは一方に収束し、消えた。その白き世界を垣間見た人々に写った次の世界は、今までそこにあつたものとは違い。破壊された自分たちの世界がそこにあつた。

後の調査によると、この出来事『ワールドエンド』により世界の全都市の建築物と工業施設、軍事施設が全壊。人名被害は当時の世界人口が半分にまで減少。中でも日本は『ワールドエンド』の中心部となつたので、被害は甚大であつた。国土は『ブルー・スフィア』落下地点である九州北部が砂漠化、残つた森林もその六割が荒野と化し、死者は人口の九割に達するという規模を記録した。

この緊急事態による国家への被害と敵対国及び侵攻目的を失つた連合軍は、大戦の終結を宣言。同時に”世界統一連合”を設立し、世界各国が一つとなつてこの地球規模の危機を乗り越えていくことを誓つた。こうして前途多難ではあれど世界に一時の平和が訪れることとなる。

このとき人々は、鎖に繋がれていた脅威が放たれたことに気づいていなかった。

日本がその技術の粋を集め造った”人の形をした兵器”、より多くの敵 人間を殺すために生み出された”大量殺戮兵士”の存在を。

大戦時『殺し過ぎる者』と呼ばれた者達のことを。

第0話 プロローグ（後書き）

この物語と言えるかどうか微妙な作品はフィクションです。
作品内で登場する国名・組織・出来事・人物などその他諸々は、実
在するそれらとは一切関係ありません。

最後までお読みいただきありがとうございました。読みにくい・理
解しづらい文章だったとは思いますが、感謝の極みであります。
書いていて自分の文章力及びボキャブラリーのなさを痛感致しまし
た……。これから精進せねばなりません。

追記）以前は第1話 - 1と合わせたものを投稿していましたが、閲
覧のしやすさを考慮した結果、分割させていただきました。

文章が読みにくいのであんまり意味がない気もしますが……（汗）

第1話・1 荒野で目覚める青年（前書き）

物語の本筋に突入です。読みづらく、わかりにくい文章も相変わら
ずです……（血涙）

第1話・1 荒野で目覚める青年

「めんどくせえ……」

砂とわずかな草、大小様々な岩が転がっている荒野　そんな殺風景が延々と広がる場所に青年が大の字で寝そべっていた。閉じていた瞼をゆっくりと開け、視界に広がる青空を見ながら、心底うんざりだと言わんばかりに、ため息のように呟いた。

(朝　いや、もう少しで昼間というところか)

視線を太陽に向け、その位置と高度を見て現在の時刻を大雑把に割り出すと、降り注ぐ陽射しに目を細めながらゆっくりを青年は上体を起こした。そして、彼が眠っている時からずっと視線を投げつけてくる背後の人物に質問した。

「で？お前はなんで俺なんかを見てんだ？」

しゃがみこんで彼の様子を伺っていた人物が驚いた表情を浮かべた。まさか自分に声をかけてくるとは思わなかったのだろう。慌てて立ち上がり、動揺した声で話し出す。

「あの……その……わたしここから東にある町に住んでるんですけど！ えっと……昨日隣町に行っていて！ あっ、隣って言うても遠いんですけど……」

「あー……もういい」

やたら遠回り、かつたどたどしい返答に青年は聞く気が失せた。

声を聞く限りでは女　少女といってもいいぐらいの年齢だろう。
彼は顔を横に小さく振って発言を中止させると、地面から腰を上げ、
渋々その人物に顔を向けた。

予想通り、そこにいたのは少女だった。

彼女はうつむいていたが青年が立ったのに一拍子遅れて気づき、
勢いよく顔を上げて青年と目が合った。

綺麗というよりは可愛らしいといった雰囲気少女、歳は15、
16ぐらいだろうか。胡桃色の肩の辺りまで伸びた髪、ベージュの
ロングTシャツに白黒のチェックのロングスカートといった装いで
顔をほのかに赤く染めていた。

(隙だらけだな。武器らしいものも持ってないようだし)

どうやら自分に敵意があるわけではないらしい。と、青年は少女
を観察しながら思う。

あの『ワールドエンド』から3年経ち、争乱が続いた世界も現在
”世界統一連合”により徐々にではあるが沈静化しつつはある。

しかし、それは表面上のことであり、食料不足や水不足による略
奪、それに伴う暴動や殺人の横行、大戦で使用された兵器による人
命被害など、それ以外にも多く発生している問題は、絶えることは
なく世界の各地で起こっている。

連合もそんな状況を立て直すべく尽力しているようだが、まだ設
立して年月が浅いこともあり、対策が追いつかずどこもかしこも未
だ無法地帯と化しているのは否めない。ここ極東地域　かつて日
本と呼ばれた地域は最もそれに当てはまるであろう。

人々は怯えていた。明日、いや数時間後　あるいは数分後数秒

後には己の命が奪われてしまふかもしれない日常に。今、青年と相対している少女もその一人のはずなのだ。自分が生き残るために他者を犠牲にする。例え、その他者がどんなことになるうとも。

もし仮に、少女が生きるために青年に略奪を行うつもりがあったのなら、青年が寝ている間に済ませてしまえばいいだけのことだ。金品を奪う　といつても彼は無一文のだが　、身包みを剥ぐぐらいのことはできたはずだ。

しかしそれらを一切行動に移さない彼女に、青年は違和感を眠っている時から覚えていた。いや、正確には眠っている振りをしていた時からといえる。彼は少女に見つける前から、狸寝入りしていたのだ。

それはなぜか？なぜなら、そもそも彼にとって睡眠は”必要不可欠なものでない”からである。

話が逸れてしまったが、それはさておいて、青年は彼女からあきらかな敵意や殺気じみたものを一切感じなかった。むしろ彼の身を案じていうような不安げな表情を見せている。

そんな彼女を、青年は表情を変えるでもなく、ただ見つめていた。

「えつと……こんなところで何をしてたんですか？」

少し落ち着いてきたのか、スカートに付いた砂を掃いながら今度は少女が問いかけた。

「見ていたならわかると思うが？」

「じゃあ、ほんとに寝ていただけなんです……」

厳密に言えば寝ていたとは言えないのだが、青年はさもそれが事実かのように問い返す。

「それ以外になにがある？」

「いえ、てつきり行き倒れてるのかなって思ったんです。ここ、目印も何も無いからよくいるんです。そういう人が……」

確かにこの荒野は、彼女の言うとおり町の存在を示すものなどない。そんなところで倒れている人間がいれば行き倒れだと思われてもおかしくはないし、最悪の場合、死体かもしれない。青年を見つけた少女は、そのどちらなのかを確認したかったのだろう。当事者である青年の態度は当たり前なことを訊かれたような素っ気無いものだったが、彼女はそれを気にする素振りもなく、安堵の笑みを浮かべていた。

よかった。と小さく呟き、胸を撫で下ろしていた。どうやらお人好しな性格のようだ。

青年は相も変わらず無表情であるが。

(こちらに害はないだろう)

ここでようやく青年は自身の警戒のレベルを落とすことにした。例えそれが誤った判断だったとしてもなるようになる……と青年はそう思うことにした。

「そういえば町から来たと言ったな。お前」

「あつ、はい。ここから東にある町から来ました」

青年の声に彼女の表情にまた緊張が走る。

「その町からここまででは距離があるようだが、そのスクーターでここまでできたのか？」

青年は少女の背後に隠れるように停めてあったスクーターに視線を向けた。長方形のソーラーパネルがフロントライトの真上の辺りに埋め込まれているところを見ると、太陽電池による電動スクーターのようだ。赤い車体は少々錆び付いており、砂埃も付着している所為か、故障したためにその場に放置されている様に見える、動かせるかどうか怪しく感じる。

「そうです……あつ！　こんなに砂が……帰ったら洗わないと」

「珍しいな。そんな古いものがまだあったのか」

「町に住み始めのころに拾ったんです。そのときは壊れてたんですけど、わたしのお父さんが直してくれて……お父さん、町で機械の修理工をやってるんですよ。いつもはお兄ちゃんが乗ってるんですけど、今は借りてるんです」

少女はスクーターに駆け寄り、シートに付いた砂を掃いながら嬉しそうに応えた。まるで自分の宝物を自慢するかのよう。事実、そうなのである。青年がスクーターに興味を示した時、無意識であるだろうが彼女の表情は、さっきまでの強張ったものが無くなり、完全に柔らかいものになっていた。

「そうだ！　あの、おなか空いてませんか？」

唐突に少女が青年に訊いてきた。

「別に」

だが、警戒のレベルを落としたとはいえど、青年の素っ気無さは変わらずである。

「喉も渴いてないですか？ 疲れてたりも……」

「別に」

「そうですね……よろしかったらご馳走しようかと思ったんですけど……」

「む、水と食料をくれるのか？」

少女の問いかけの意味を青年はようやく理解した。彼の中では彼女の発言は思いもよらないものだったらしい。それまではなんの変化も見せなかつた彼の顔に一瞬驚きが見えた。

「えっ……あ、はい……といつてもご馳走って呼べるほどのものではないとは思いますが……？」

「構わない、炭水化物と水さえあればな。あればたんぱく質を摂取できればいいが……」

青年は腕を組み、何かを悩む姿勢を見せたのものの「まあ別にいいか」と自分だけで結論を出してしまったようだ。

「た……たんすいかぶつ？ 確かお米やパンなんかに含まれてる栄養素でしたっけ？」

普段あまり聞かない単語ではあったが、少女は記憶の片隅にあった情報を青年に確認してもらおう。

「まあそんなところだ」

「……やっぱりおなか空いてたんですか？」

申し訳なさそうな少女の問いかけ。

「空いてはいない。というか、食事自体そんなに必要ない。ただ食事の有無で、自身のエネルギー効率が若干ではあるが変化する。だから食事が可能であれば食べるぐらいだ」

「は……はあ……？」

青年の言動がよくわからなくなった少女は、頼りない相槌を打つしかなかった。あきらかに今までとは違う反応に戸惑っているようだ。しかしすぐに気持ちを切り替え、青年に提案する。

「ともかく、町にご案内しますよ。ここじゃなんだし」

少女はスクーターに跨ると、シートの後部座席というにはわずかに狭いスペースを手でポンポンと叩いた。ここに乗ってください、という催促らしい。

「……動くのか？ 俺が乗って？」

一人が乗る分には問題なさそうだが、二人で、しかも大の男を乗せて走行できるような馬力があるようには、このスクーターには見えない。そう思わざるを得ない程にあまりにも頼りない外観をしている。

「大丈夫ですよ？ いつもわたしとお兄ちゃん二人で乗ってますし、壊れたことなんてないです。さすがはお父さんです」

誇らしげに胸を張る少女を、訝しげな目で青年が見ていた。なぜそこまで父親自慢するのか、青年にはわからなかったが、ここは余計な発言をせずに少女の提案を受け入れた方が妥当と判断し、スクーターに歩み寄る。ここは彼女の愛車の頑丈さに期待しよう。彼はそう自分を納得させた。

（一応体重は軽くしておくか……あのスクーターが故障したらめんどくせえだろうし）

青年がそう頭の中で呟いた瞬間、彼の歩みが速くなったように見えたが、少女は気づかなかった。

「そういえば自己紹介してませんでしたね。わたし、サラっています。よろしくお願ひします」

「俺は……クロウでいい」

第1話・1 荒野で目覚める青年（後書き）

この物語と言えるかどうか微妙な作品はフィクションです。作品内で登場する国名・組織・出来事・人物などその他諸々は、実在するそれらとは一切関係ありません。

最後までお読みいただきありがとうございました。

以前、第0話と合わせたものを投稿していましたが、閲覧のしやすさを考慮した結果、分割させていただきました。

第1話・2 廃墟の町にて（前書き）

ヒロイン登場。しかし、その娘の描写をうまくできてるか自信はありません（滝汗）

第1話・2 廃墟の町にて

荒野を走るスクーターには一組の男女乗っている。ハンドルを握るのは自身をサラと名乗った少女、そしてシートの後部には自身をクロウと名乗った青年だ。背中合わせの状態で二人乗りしている様子はバランスが悪そうに見えるが、二人は……というか後部に座るクロウは器用にバランスをとっているようだった。

「へえ〜九州からここまで来たんですか？」

町に向けて出発したときからクロウはサラからの質問攻めにあっていた。時間にして一時間は経過しているだろう。最初はしかたなく答えていたクロウではあったが、三つ目の質問辺りからうんざりしていた。しかし、案内してもらっている手前、邪険にするわけにもいかずクロウは適当に返事をすることにしていた。彼女からしてみれば初対面であるクロウとコミュニケーションをとるためにやっていることなのだろうが、

(まったくもってめんどくせえ……)

クロウは空を見上げ、大きく息を吐く。

「クロウさん？」

「……いや、なんでもない。で？」

「九州から歩いてくるなんてすごいですね」

「別に」

サラの感心は無感心で返すクロウ。彼としては無駄口を叩かずに運転に集中して欲しいというのが本音ではあるが、サラがクロウのそんな内心を読みとることはなく、質疑応答は続いた。

「でもすごいですよ？ 九州は今、連合政府が危険地域にしている土地だってお兄ちゃんが言っていました」

「そういえばそうだったな」

現在の九州はサラの言ったように世界統一連合政府（以後、連合政府）により第一種危険地域に指定されている。第一種というのは危険度を三段階で表したもので、その中でも最も危険ということを示している。これは危険度が下がるに連れて第二、第三と数字が増えていくようになっていく。かつて『ブルー・スフィア』が落下し、そして消失した地であり『ワールドエンド』の中心地であるこの地域は、土壌汚染や二次災害の危険性から最高位の”第一種”の危険地域となっているのである。

「実際のところ危険でもなんでもないがな。おそらく土地の調査の邪魔になる民間人を遠ざけるために政府が勝手に危険地域と言っているだけだろう」

謙遜するでもなく、自慢するでもない淡泊な口調でクロウは実際にその地を放浪していた際の見解を述べた。実際クロウの見解は当たっていて、第一種危険地域というのは公に発表している建前である。本当の目的は『ワールドエンド』の原因解明であり、それを行う上で九州は連合政府が最優先で確保しておきたかった土地であった。そんなところに無関係な民間人が居ては精密な調査ができないと判断した政府は、九州を最高位の危険地域と発表することで不用

意に民間人を近づけさせないようにした、というのが真相だ。

「そっか、あれがあったところですよもんね……」

クロウの意見にサラはうんうんと頷く。そんなに合点のいくものだったのか？ とクロウは訊こうとしたが、それでは質問攻撃が余計に強まるのではなからうかと思いつき、発言を控えることにした。

「でもわたしは九州は危なそうな感じがします。それにあそこは怖いですが……何が怖いのかはうまく言えないんですけど……」

「荒野のど真ん中で寝てる男に声かける方が怖いと思うが？」

もつともな意見にサラは苦笑をもらす。が、ついさっき発言を控えると自身の制約をさっそく破ってしまったことに、クロウは表情には出てはいないものの驚いているようだった。彼には思いもよらない、自然にこぼれ出た一言だったらしい。

「クロウさんはなんていうか……最初は怖かったですけど、それでも危ない感じはしなかったんですよ。むしろ困ってるような感じがしたんです。なんとなくなんですけどね」

「よくわからないな」

「はい、自分でもよくわかりません。でも、そんなふう思ったからほっとけなくなっただんです」

「……変な女だなお前」

ほめ言葉を言ったつもりはないクロウではあるが、ふふふ、と微

笑するサラは背中越しでもわかる嬉しそうな様子だった。

「あ、見えてきましたよ」

サラは前方を指差す。クロウは振り返り、彼女の肩越しにその方向を見ると、建物らしきシルエットが小さいながら見えた。

「あれか？」

「はい、わたしの住んでいる町です」

町に到着した二人は、スクーターから降り、歩いてサラの住まいに向かっていた。

(町というか廃墟だな)

クロウの所感である。

町のほとんどの家屋は半壊し、コンクリートの壁からは鉄骨がむき出しになっていた。それらに並んで、全壊したと思われる建物の残骸がそのまま放置されており、コンクリートの塊や折れた木材などが積み重なって廃材の山が出来上がっている。二人が歩いている縦横にひび割れたアスファルトには建物が崩れた際に割れたガラスの破片が散らばっていて、歩を進めていくたびにパキリパキリとガラス特有の破碎音が鳴り、一定のリズムを刻む。

「ここをまっすぐ進むとわたし達の家に着きます」

「そうか」

そんなオンロードであったはずがオフロードと化している一本道をサラはスクーターを押しながらクロウの一步前を歩いて先導している。適当な相槌を返したクロウはというと、すれ違う町の人々を観察していた。

走り回る子供達。廃材の山から使えそうな材料を掘り出し、それを使って半壊した家屋に補強を施す男達。その家屋の近くの空き地では、女達が男達の為に昼食の準備をしているようだった。皆、人が生活するにはお世辞にも良いとはいえない環境下であるにも関わらず、笑顔にあふれている。

クロウの様子に気づいたサラは語りだす。

「この町にわたし達が来たときは大変でした。毎日喧嘩や泥棒が絶えなくて……みんな誰も信じれなくなっていました。でもそれじやいけないってわたしのお父さんがみんなに呼びかけたんです。みんな協力していこうって。助け合おうって……時間はかかりましたけど、みんなそれをわかってくれました。それから争いごともなくなっていて、今ではこの町のみんなが笑顔で生活できるようになっています。わたしは今のこの町が好きです。そしてそんな町にしてくれたお父さんをとても尊敬しているんです」

町人達に向けた視線をサラの背中に戻してクロウは彼女の話に耳を傾けていた。

彼女の中では父親はどうやら英雄のような存在になっているらしい。どうりで父親自慢が多いわけだ、とクロウは勝手に度々感じて

いた疑問の答えをそう解釈した。父親の偉業を多くの人知ってほしい、賞賛してもらいたいという願望の現れなのだろう。が、クロウは微塵もそのような心持ちにはならなかった。

（自分の手柄でもないことをなぜそんなに他人を誇れるんだか……）

話を聞いていたクロウが抱いた感想は冷めたものだった。口に出そうかとも思ったが、彼に働いた後々めんどくさいことになりそうという直感がそうはさせなかった。

彼はとてつもなくめんどくさがりやなのである。

実のところ、彼はサラのスクーターに乗せてもらわなくても、その半分以下の時間でこの町に到着することができたし、そもそもこの町の所在も彼女に案内してもらわなくともおおよそではあれど知っていたのだ。

ではなぜそれらを自身で行動しなかったのか？

それは彼がめんどくさがったからに他ならない。クロウは自発的に行動を起こさないのである。

だが例外はある。それはめんどくさい状況に巻き込まれそうに、もしくは巻き込まれた場合、彼は己が思考に基づいて行動する。先のサラに抱いた感想を発言しなかったのは、これに基づいた回避行動だった。

しかしこれだけでは”とてつもなく”というのは大袈裟である。だが、これだけにとどまらない。その証拠に、彼は人としての根本的なものすらも煩わしく感じているのだ。それは

クロウとサラの両名がサラの自宅に向かっている最中、二人が先ほど通過した町の入り口に軍用トラックが二台停車した。それらに遅れて白いビツクオフロオーダータイプのバイクが一台、二台のトラックの間に停車する。

トラックから降りてきたのは迷彩服に身を包んだ男達。バイクに乗車している人物は、メーター部分に設置されているタッチパネルで何かのコンソール画面を開き操作している。（『ワールドエンド』以前の時代のバイクには、ハンドルのメーター部分に速度計やタコメーターだけでなく、現在地を表示する地図や、自動操縦、故障箇所のチェックなどの管制システムが一体となって取り付けられており、それらをタッチパネル等で表示・操作することができるのが主流だった。）

バイクに乗っている人物の服装はトラックから降りてきた男達とは違い、肩から腰辺りまでの長さの黒いマントを羽織り、その内側からは白い軍服のようなジャケットが見え隠れしている。腰から下の格好は白いスラックスに靴は黒のロングブーツ。顔には赤いフルフェイスのヘルメットを被っており、性別はマントとヘルメットで上半身が全て覆い隠れていることもあってか、窺い知ることができない。だが、スラックス越しからでもわかる細く長い脚からブーツを履かずとも身長はそれなりにあることが想像できる。

「リユーネベルク中尉」

トラックの荷台付近でなにかの作業していた迷彩服の男達の一人がバイクに駆け寄り、敬礼をした後に声をかける。それに気づくと自身のヘルメットを脱ぎ、バイクの人物は素顔をさらした。

現れたのは女性だ。漆黑でありながらも日の光を浴びて淡く艶やかな輝きをみせる長い髪を一つに束ねており、大きな瞳は蒼く、細く通った鼻筋や、小さいながらもそれでいてぷっくりと弾力のありそうな唇。ガラス細工のようにきめ細やかさと儂さを感じさせる白い肌は、もはや芸術的と言えるほどの美しさがある。ヘルメットを脱ぐ、というありふれた動作をしただけの彼女であったが、バイクに駆け寄った男はその何の変哲もない動きを見ていただけで息を呑み、緩んだ顔のまま固まっていた。

「ごめんなさい、ブレーキに違和感があったから確認してたのよ。それで？ 準備はできたの？」

リユーネベルクと呼ばれた彼女は、バイクから降り、依然として惚けている男に敬礼を返し問いかけた。一瞬間遅れて男がそれに気づき、姿勢を直し再び敬礼をし直す。しかし目線は彼女ではなく、彼女の頭上に広がる空に向けていた。

「とっ……整ったのであります！ 自分はその報告と住民への呼びかけを開始する許可を頂きたく……」

「そんなに緊張しなくてもいいわよ？」

「はっ！ ご不快でしたか！？」

「そうじゃないけど……ああ、許可ならいちいち取りに来なくていいわよ？ 早く配給を行いましょう。ここに住んでる人達もそれを望んでるわ」

「イツ…イエスマム！ 失礼しました！」

男は回れ右をして、逃げるかのように元居たトラックの荷台付近で作業する集団の中に戻っていった。それを苦笑しつつ見届けた彼女は、ふと、トラックの車体に白く大きく書かれた文字を見つめた。

”UPF”と書かれたこのアルファベットが意味するものは”統一平和維持軍(Union Peacekeeping Force)”の略称である。

大戦時にアメリカ軍を中心として日本を除く国々によって組織された連合軍が、『ワールドエンド』の後に名称を変えて再度組織化した軍であり、現在は主に食料の配給や危険地域の監視、駐屯地域の治安維持などを行っている。迷彩服の男達はそれに所属する兵士であり、今まさにこの町で物資の配給を行おうとしているのだ。

彼女もUPFに属する人間ではあるが、しかし、彼女の今回の任務は配給ではなく別にある。

「何事も起きなければいいんだけどね……」

その任務が徒労に終わるように　と願いながら、彼女、リエ・S・リユーネベルク中尉は自分と瞳と同じ澄み切った蒼い空を見上げ、祈るように呟いた。

第1話・2 廃墟の町にて（後書き）

この物語と言えるかどうか微妙な作品はフィクションです。作品内で登場する国名・組織・出来事・人物などその他諸々は、実在するそれらとは一切関係ありません。

最後までお読みいただきありがとうございました。

以前、第1話・3と合わせたものを投稿していましたが、閲覧のしやすさを考慮した結果、分割させていただきました。

第1話・3 凶弾（前書き）

ようやくアクションものっぽい事件が勃発。しかし物語のテンポが悪いか、緊迫感に欠ける気がする……（涙目）

第1話 - 3 凶弾

一方のクロウとサラは、目的地である彼女の自宅近辺まで到達していた。途中サラの知り合いらしき中年の女性に声をかけられ、サラと雑談を始めた為に時間がかかったとはいえ、ようやく目的を果たせることにクロウは安堵していた。ここでももちろん無表情で。

「はむ……そういえばまだ訊いてませんでしたね」

先ほど出会った中年の女性 gave くれた焼き芋を食べ歩きながら、サラは思い出したように一歩後ろを歩くクロウに顔を向けた。

「……む……何をだ？」

また質問攻めか、と呆れ返り気味に聞き返すクロウ。ちなみに彼も女性から焼き芋をもらっており、それにかぶりついている。余談ではあるが、彼が食事を取るのには実に三ヶ月ぶりである。

閑話休題。サラは若干緊張した面持ちで話を続ける。

「クロウさんはその……なんで旅をしてるんですか？」

「……旅をしているつもりはないんだがな」

「でもなにか目的があるから九州からここまで来たんですよ？」

クロウは話をはぐらかそうしたが、サラの追及は止まらなかった。彼女は立ち止まり、彼の目をじっとみたまま返答を待つ。

「……俺は」

言い逃れはできそうにないな、と彼女の横で歩を止めたクロウが観念して話し出そうとしたその時。前方から怒声罵声が聞こえてきた。

二人が声の発せられた方に視線を向けると、男達が言い争いをしていた。

人数は七人。うち五人が残りの男二人に詰め寄り言い争っている。距離があるため、男達が何を言っているのかはよくわからないが、詰め寄っている五人 全員が黒の革ジャケットとジーンズ姿である。態度からは品性のかけらもない。ようするにガラの悪い連中だというのが見てわかる。対する詰め寄られている側の二人はたじろぎながらも何かを言い返しており、姿はガラの悪い男達が人垣となつているためよく見えないが、どうやら青年と中年の男の二人組みのようである。

「お父さん？ お兄ちゃん？」

目を凝らし様子を見ていたサラが声をもらす。

瞬間。

パンツという乾いた音が町に響いた。続けて三回、同じ音が輪唱のように後に続いた。

発信源はさつき言い争っていた男達の集団からだ。だが、すでに彼らは言い争ってはおらず、ガラの悪い男達の一人の手に拳銃が握られており、その足元には言い争っていたはずの男二人が倒れていた。

「お父さん！ お兄ちゃん！」

サラは叫ぶと同時に集団に向かって走り出した。男達の人垣を掻き分け、仰向けで倒れている男二人に近寄る。クロウも後に続いて歩き出した。

「お父さん！ サラだよ！ お兄ちゃん！ しっかりして！」

倒れた二人の体を交互に揺するサラ。彼らは大量に出血していた。出血は二人の衣服を滲ませているだけでなく、地面にも血が流れ出していた。ひび割れた黒いアスファルトを血が赤く塗りつぶし、その割れ目に染み込んでいく。

「お父さん！！ いや！！ お兄ちゃん！！ ねえってば！！！」

涙声になりながらサラは懸命に呼びかける。

「……………ラ……………」

「お父さん！」

その呼びかけに反応したのはサラがお父さんと呼んだ相手だった。彼は傷のせいか言葉をうまく発することはできないようだった。彼は震える手をサラの頭に乘せ、ゆっくりと撫でる。そして、

「お……………か……………え……………り」

と搾り出した声で呟くと、彼の手が彼女の頭から崩れ落ち、力尽きた。

「いや……いやっ！ やだ！！ 目を開けて！ お父さん！ お兄ちゃん！」

サラが先程より強く父親と兄の体を揺するが、二人が反応することはない。

「やだ……やだよう……目を開けてよ……お父さん……お兄ちゃん……」

少女は大声を上げて泣き崩れた。父と兄、二人の手を握りながら。

「何？ おまえこいつらの身内？」

そこにまるで関係ないといった口調でサラに話しかけてきたのは、彼女の後ろでやりとりを見ていたガラの悪い男達の一人だ。

「こいつら、アニキのバイクが直せないとかぬかしやがったんだぜ？」

「使えないやつは生きてても仕方ねえよなあ？」

「アニキの命令を素直に聞かねえからそうなるんだよバカなやつらだぜ」

他の男達も続けて心無い言葉をサラに浴びせる。

「まあまあお前ら落ち着け。よく見たらそいつなかなかかわいい顔してんじゃないか」

そう言ったのは右手に拳銃を持った、ガラの悪い男達の間で”アニキ”と呼ばれている男だった。泣き崩れているサラを見つめ、蔑むように笑う。

一方のサラには男達の声など聴こえてはいないようだった。依然として彼女の慟哭が治まることはなく、父兄の傍らから離れようとしなない。

と、ガラの悪い男達の一人がサラに近寄り、右腕を掴んで無理矢理に立ち上げらせ引き離れた。

「おゝアニキの言う通りのかわいこちゃんだぜ」

「いや！ 離して！」

サラが掴まれた腕を振り切ろうとする。だが、到底敵わない抵抗だった。少女の彼女と男の体格は一回りも二回りも違う。力の差は歴然だった。それでもなお彼女は必死に父兄の傍らに戻ろうとした。

「暴れんなよ子猫ちゃん」

アニキがサラの至近距離で銃口を向けていた。

「ひっ」

サラの顔色が悲愴から恐怖に変わる。その移り変わりを満足そうに確認すると、アニキは銃身をサラの顎の下に当て、そのままくいつと顎を持ち上げ彼女の顔を熟視した。

「俺の言うこと聞けば悪いようにはしねえからよ。大人しくしよっぜ？ 子猫ちゃん。そうしたらこいつらのことも許してやるぜ？」

アニキは顎で並んで横たわる彼女の父兄たちを指す。

「あーでももう死んでるんだっけか？ なら許すも許さないも関係ねえな……くははは！」

楽しげに、されど残忍な笑い声をアニキはあげた。それに呼応するようにその他のガラの悪い男達も笑い出す。

サラは呆然としていた。顔からは生気がなくなり、全身の力が抜けているようだった。

無力な彼女はただ、静かに涙を流すことしかできない。

「おい、お前の家はまだなのか？」

頭を掻きながら、クロウが男達の集団の後方で止まった。笑い声はやみ、皆いつせいにクロウを見る。対して彼は焼き芋の最後の一口を頬張り、彼を睨むガラの悪い男達、その足元で倒れている二人を順番に見やり、目の辺りを赤くしながら涙を流すサラと目が合った。

彼女は継^{すが}るような目でクロウを見つめていた。助けて、と聴こえざる声で叫んでいるかのようにだった。しかし彼にはそんな彼女の真意が伝わることはない。むしろ、彼は自身がめんどくさいことに巻き込まれることを彼女の目から感じ取っていた。なんとなくここはさっきのように事前にかわすことができないように思えたクロウは、ため息をついて続けた。

「お前の家はまだなのかと訊いてるんだが？」

「……てめえ誰だ？」

サラの腕を掴んでいる男がクロウに聞き返した。

「お前こそ誰だ？ その女の知り合いか？ ああ……お前がこいつが言つてたお兄ちゃんか。全然似てないな」

クロウは素直な感想を述べたが、それがガラの悪い男達には愉快だったらしく、それぞれの顔を見合わせて笑い出す。

「ははは！ おもしれー奴だなてめえ。けどはずれだ。こいつはこの子猫ちゃんの兄貴じゃねえよ」

「でもまあ、なんか用事があるんならあとにしな。子猫ちゃんはアニキにお呼ばれしてるんだ」

「そういうこつた。とつとと失せな」

痛い目に遭わないうちにな、と付け加えてクロウをあしらおうとする男達だが、彼は引き下がらない。

「そういうわけにはいかないな。そつちこそこちらの都合がついてからにしてくれ」

その場に漂う空気が変わる。

男達の目つきが一気に鋭くなり、自分に対する敵意がむき出しになっていくのをクロウは感じ取っていた。しかし、これでもなお彼の顔に感情による変化は見られない。

「聞こえねーのか？ 失せろっていつてんだよ」

肩で風を切りながらアニキはクロウに歩み寄った。気の弱い人な

らばそれだけで震え上がり、逃げ出すほどの怒気を込めてクロウを睨みつけながら。

対するクロウはたじろぐこともせず、あくまで無表情でアニキを視線を合わせる。

「聞こえているから答えたんだが？ お前こそ言葉を理解しているのか？」

するとアニキは自身の手に握られた拳銃の銃口をクロウの眉間に押し当てた。

「だから消えろつつつてんだろ……なんならそこに倒れている奴らみたくてめえをこの世から消してやるつか？ ああ？」

「……はあ、だから」

クロウの台詞は一発の銃声にかき消される。アニキが引き金を引いたのだ。

ゼロ距離で撃たれた反動を受けてクロウの体は宙に跳ね上がり、そのまま背中から倒れ落ちる。

「ウゼえから黙ってるクソが」

口元を歪ませ、アニキが吐き捨てるかのように言った。

「いやあああああああああああああああー！！」

サラが絶叫する。そして自分の持てる全ての力を使って、再び男に掴まれたままの右腕を振り解こうとするも、簡単に押さえつけられてしまった。

アニキは満面の笑みを浮かべながらふり返る。

「さて、ウザい奴がいなくなったところで、楽しもうぜおま」

「おい」

クロウがゆっくりと立ち上がり、自分を撃った相手呼び止めた。クロウの眉間から弾丸がこぼれ落ちる。見れば銃創どころか傷一つなく、腫れ上がってもいない。

「は？」

撃った相手、アニキはクロウに向き直った。その顔に先程までの笑みはなく、何が起きたのかわからないといった不思議そうな表情でクロウを見ている。

「お前、俺を殺そうとしたな」

アニキにクロウは確認する。

アニキは答えない。答えられなかった。今自分が置かれている状況を把握できていない。

「なら無理だ。銃で頭を撃つぐらいでは俺は殺せない」

クロウは語る。冷徹に、淡々と。

「そついやまだ言ってなかったな……　おい、サラ……とかいったか？」

いきなり自分の名前を呼ばれ驚くサラは返事をしなかったが、ク

ロウはサラに視線を向け、こう言った。

「俺は死ぬために極東こくとうを放浪している。極東は俺が造られた場所だからな。俺が死ぬ方法があってもおかしくはないだろう」

「え？」

台詞の意味が理解できないサラは、間の抜けた声を出す。無理もない。

彼女はクロウが”生きることすらめんどくさいと常日頃から感じている”ことなど知る由もなかったのだから。彼のとてつもないめんどくさがりは、己が命の扱い方にまで影響を及ぼしているのだ。

「極東こくとうで造られただけ……？ まさかてめえ」

「そうだ、人間おまえたちが『殺し過ぎる者』と呼ぶ者だ」

アニキが再度拳銃を構えながら言い切る前に、クロウはそう言い放った。

少女と男達に戦慄が走る。

「さて……『殺し過ぎる者』オーバーキラーは自身を殺そうとしたものを排除するように教育を受けている。めんどくさいことにな」

クロウは肩を竦め、拳銃のグリップを小刻みに震えながら握りしめ、こちらに狙いを定めるアニキを見据える。

「それでは、正当防衛開始だ。頼むから俺が死ぬより先に死ぬな」

そのとき初めてクロウが見せた明確にわかる表情は、狂気に満ちた、背筋が凍るほどの不気味な笑顔だった。

第1話 - 3 凶弾（後書き）

この物語と言えるかどうか微妙な作品はフィクションです。作品内で登場する国名・組織・出来事・人物などその他諸々は、実在するそれらとは一切関係ありません。

最後までお読みいただきありがとうございました。

以前、第1話 - 2と合わせたものを投稿していましたが、閲覧のしやすさを考慮した結果、分割させていただきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4039r/>

ハイネ～黄昏色のオーバーキラー～

2011年10月8日11時48分発行